

RCMS NEWS

1
1999

NAGOYA UNIVERSITY
RESEARCH CENTER FOR MATERIAL SCIENCE

RCMS

T464-8600名古屋市千種区不老町
TEL: 052-789-2486
FAX: 052-789-2487

Reports and Communications of RCMS Activities
Reports and Communications of RCMS Activities
Reports and Communications of RCMS Activities
Reports and Communications of RCMS Activities
Reports and Communications of RCMS Activities

平成11年3月
第1巻 第1号



名古屋大学物質科学国際研究センター創設記念式 (平成10年11月12日)

CONTENTS

物質科学国際研究センターニュースの創刊に際して	センター長 山内 脩	2
物質科学国際研究センター門標上掲		3
創設記念行事		4
創設記念講演	ハロルド W. クロトー 博士 「科学: その完全なるもの - 科学する喜び - 」	6
創設記念講演	長倉 三郎 博士 「科学研究における複眼的視点 - 物質科学を中心にして」	7
名古屋 COE 国際シンポジウム「分子集合系の機能とキャラクタリゼーション」を開催		8
H. シーゲル先生との懇談会 - ヨーロッパの科学研究事情について -		9
外国人客員教授紹介		10
RCMS 行事予定		11
スタッフリスト		12

物質科学国際研究センターニュース の創刊に際して

名古屋大学 物質科学国際研究センター
センター長 山内 脩



平成10年度、名古屋大学にわが国最初の物質科学に関する中核的研究拠点として「物質科学国際研究センター」(RCMS)が設置され、すでに活発な活動を開始しております。本研究センターの様々な活動状況を広くお知らせするため、ここにRCMSニュースを刊行する運びになりました。今後、本研究センターの動きのみならず、物質科学と社会との結びつきをはじめとして物質科学研究へのご理解と成果の社会への還元少しでも役立つ広報に育てたいと思っております。RCMSニュースに関するご意見、ご感想などをお聞かせ下されば幸いに存じます。

20世紀には医薬、農薬、繊維などあらゆる種類の物質が化学的に造り出され、今日の豊かな物質文明を生み出しました。これは化学と化学工業による人類への偉大な貢献であります。これに対して、来るべき21世紀は省資源、省エネルギー、環境保全の世紀であり、地球上の限られた資源、環境を保ちつつ、いかに健康で文化的な生活を維持し、社会の高度化を可能にするか、に人類の英知が試される時代です。すでに社会の諸活動においてリストラによる合理化が進行し、国立大学も新たな変革に直面しようとしています。物質科学国際研究センターはまさに時代の変革期に生まれ、本学において進行中のCOE形成プログラムをい

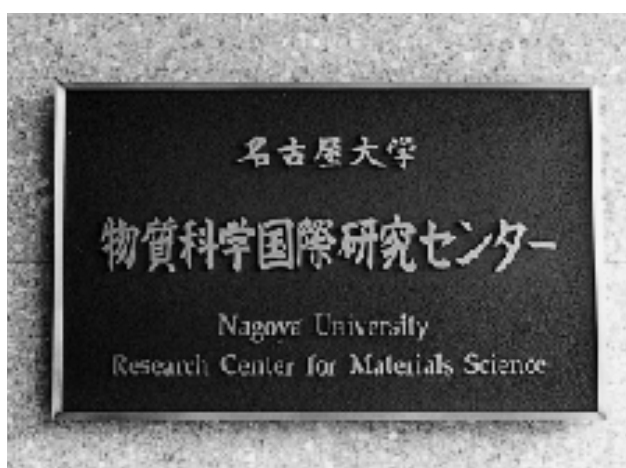
ち早く具現したものであり、全く新しい発展が期待される研究拠点であります。この時期にあればこそ、本研究センターの研究活動に一段と厳しさが求められ、新しい物質科学の基礎学問の構築と真に有用な物質の創製をより高度に追究する、新時代の研究センターのあるべき姿が問われるわけであります。また、国際研究センターという名の示すごとく、本研究センターは国際アドバイザーボードを設置して国際的助言・評価を受けつつこれに応えうる体制をとり、国内客員教授との共同研究に加えて外国人客員教授を軸とする国際共同研究の展開を重要な活動の一つとしていますが、これにより一日も早く世界における地位を確立することが必要です。

本研究センターのスタッフ一人ひとりがこれらの活動を通してセンターの存在意義を内外に明らかにしていくことを期し、RCMSニュースをその情報発信の一翼を担うものとすべく努力してまいります。皆様の暖かいご支援とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

物質科学国際研究センター門標上掲



門標上掲の様相 左から辻副総長、野依理学研究科長、山内センター長、松尾総長、山下副総長、福島事務局長



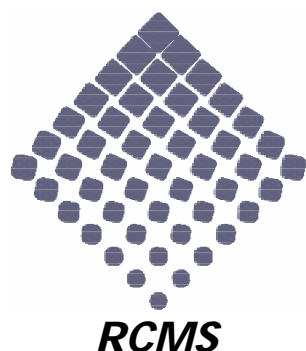
物質科学国際研究センター門標

平成 10 年 10 月 20 日にセンター関係教職員が見守る中、松尾総長、辻副総長、山下副総長、福島事務局長、野依理学研究科長及び山内センター長の手により、本センターの門標が名古屋大学理学部A館正面入口に上掲されました。

ダークグリーンの地に浮かび上がる金色の「名古屋大学物質科学国際研究センター Nagoya University Research Center for Materials Science」の文字は、物質創造の基礎研究を総合的かつ国際的に推進する本センターの位置付けを象徴しております。

今この門標のもとに、国内外の多くの研究者の英知が結集し、物質科学に関する国際的な研究拠点として発展するよう、センター関係教職員一同が意志を一つにするひとときでありました。

物質科学国際研究センターのシンボルマーク



下から上に向かって、たくさんの円が回転しながら徐々に四角形に変形するさまは、自然の素材から、様々な化学反応を行うことで、高度な機能を持つ機能物質を創製するプロセスを表現すると同時に、多様な有用物質を生みだし、研究成果で広く世界に貢献したいという、私たちの決意を示しています。

(松本 正和)

創設記念行事

名古屋大学分子不斉研究ユニットによって平成7年度より推進されている中核的拠点形成プログラム「分子不斉の基礎と応用に関する研究」の発展型として、平成10年4月に「名古屋大学物質科学国際研究センター」の設立が認められました。これを記念して、11月12日に創設記念講演会、創設記念式及び創設記念交歓会が学内施設において盛大に開催されました。

記念講演会では、「物質科学の未来を語る」と題してノーベル化学賞受賞者のサセックス大学教授ハロルドW. クロトー博士と文化勲章受章者の東京大学名誉教授長倉三郎博士（現、神奈川科学技術アカデミー理事長）による講演が豊田講堂において行われました（詳細は6～7ページ参照）。



創設記念講演会（於 名古屋大学豊田講堂）



学術国際局長の祝辞を披露する合田研究機関課長

記念交歓会はグリーンサロン東山において行われました。山内脩センター長の挨拶、長倉三郎神奈川科学技術アカデミー理事長、森正夫愛知県立大学長、架谷昌信理工科学総合研究センター長の祝辞の後、福島忠彦事務局長の発声で乾杯し、同センターの創設を祝いました。歓談中、講演者のクロトー教授から特別に祝辞を頂く場面もあるなど、盛会に終わりました。

（北村 雅人）



記念交歓会でのクロトー教授と野依理学研究科長

プログラム

創設記念講演会

「物質科学の未来を語る」

1. 開会の辞
2. 挨拶
名古屋大学物質科学国際研究センター長 山内 脩
3. 記念講演
サセックス大学教授・ノーベル化学賞受賞者 ハロルド W. クロトー 博士
“ Science, a Round Peg in a Square World ”
「科学：その完全なるもの - 科学する喜び - 」
神奈川科学技術アカデミー理事長・文化勲章受章者 長倉 三郎 博士
「科学研究における複眼的視点 - 物質科学を中心にして」
4. 閉会の辞

創設記念式

1. 開会の辞
2. 挨拶
名古屋大学副総長 山下 興亜
名古屋大学物質科学国際研究センター長 山内 脩
3. 来賓祝辞
文部省学術国際局長 工藤 智規
東北大学大学院理学研究科長 荻野 博
名古屋大学大学院理学研究科長 野依 良治
4. 閉会の辞

創設記念交歓会

1. 開会の辞
2. 挨拶
名古屋大学物質科学国際研究センター長 山内 脩
3. 来賓祝辞
神奈川科学技術アカデミー理事長 長倉 三郎
愛知県立大学学長 森 正夫
名古屋大学理工科学総合研究センター長 架谷 昌信
4. 乾杯
名古屋大学事務局長 福島 忠彦
5. 懇談
6. 閉会の辞

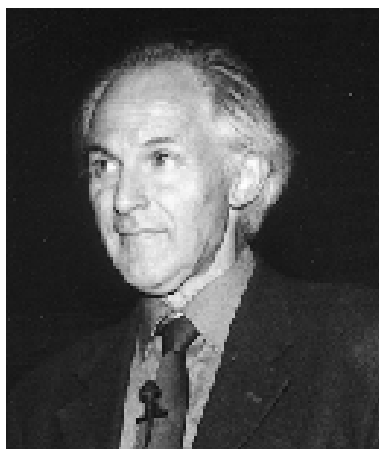
(敬称略)

創設記念講演

“ Science, a Round Peg in a Square World ”

サイエンス

科学：その完全なるもの - 科学する喜び -



英国サセックス大学教授

ノーベル化学賞受賞者

ハロルド W. クロトー 博士

ハロルド W. クロトー先生は1939年イギリスのCambridgeshireのお生まれです。Sheffield 大学から、1964年にフリーラジカルの分光學でPh.D を取得されました。その後3年間、National Research Council (NRC Ottawa)とBell 研究所で博士研究員をつとめた後、1967年からイギリスに戻りSussex 大学 (Brighton)の講師に、1985年には教授 (Department of Chemistry and Molecular Science)に昇任されました。また、1991年にはRoyal Society Research Professorship を得ておられます。

クロトー先生のご専門は、ラジカルなどの不安定化学種、炭素や金属クラスター(及び超微粒子)のみならず、星間分子や宇宙塵のマイクロ波分光學と、その研究対象は非常に広範囲にわたっています。実際、クロトー先生はNRCの星間分子の電波天文観測チームの一員として、直鎖状炭素分子 HC_8HN (1976) と HC_8CN (1978)の発見に大きな貢献をされておられます。 C_{60} の発見につながった、スモーリー教授に炭素クラスターの共同研究を申し込んだ大きな動機も、星間空間における直鎖状炭素分子の生成機構について、実験室での解明の糸口を得たいため、と話されておられます。

これらの業績で、クロトー先生は数々の賞や名誉博士号を得られておられます。特に、クロトー先生は「炭素フラレーン (C_{60})の発見」で、R. スモーリー、R. カール (Rice 大学) 両教授と共同で1996年度のノーベル化学賞を受賞されています。また、1996年1月にはエリザベス女王より、Sirの称号を得られておられます。クロトー先生はまた、専門の研究以外にも多彩な才能を發揮されておられます。その巧みな話術は常に聴衆をひきつけます。今回の講演でも、特に会場の若い学生に熱心に語りかけるように、サイエンスにおける発見の興奮と素晴らしさを話されました。

C_{60} フラレーンの発見は、物質科学から離れた分野(天文学と星間分子)の研究から始まり、それはセレン

ディピティー(serendipity)であったことが、発見者自らの言葉で語られました。また、クロトー先生は、 C_{60} の発見がアメリカとイギリスの科学者の共同研究とはいえ、少数(教授3人と大学院生2人)の研究員の極めて個人的なレベルでの共同研究の結果であることも、強調されていました。また、1990年のフラレーンの多量合成法の発見も、ドイツとアメリカの共同研究とはいえ、少数(3人の研究者と1人のアルバイトの大学院生!)での個人的な共同研究によるものです。科学者個人の独創力と執念(と幸運)で行うことのできる大きなブレークスルーが、21世紀を目前にひかえた現在でも存在することを証明したのが、フラレーンの発見であると言えるでしょう。

物質科学における世紀の大発見は、天文学と宇宙物理学の研究途上で起こった異色のセレンディピティーでありました。クロトー先生が語られたフラレーンの発見に、失われつつある科学の発見物語とオーバーラップさせて、何かいいようなない口マンを感じたのは私だけでしょうか？

(篠原 久典)



カーボンナノチューブの模型を手に講演されるクロトー先生

科学研究における複眼的視点

- 物質科学を中心にして



長倉三郎先生は1920年、静岡県沼津市生まれ。東京大学物性研究所教授(理化学研究所主任研究員を兼任)から分子科学研究所長、岡崎国立共同研究機構長、総合研究大学院大学長などの要職をへて、現在、神奈川科学技術アカデミーの理事長をお勤めです。分子の電子構造について多くの優れた研究を行われ、また日本化学会会長、国際純正応用化学連合(IUPAC)会長などを勤められました。これらの御業績に対し、文化勲章(1990年)ほか、多くの賞や勲章を受けておられます。今回の御講演では、科学研究の様々な側面について、複眼的に、色々な切り口から論じて下さいました。

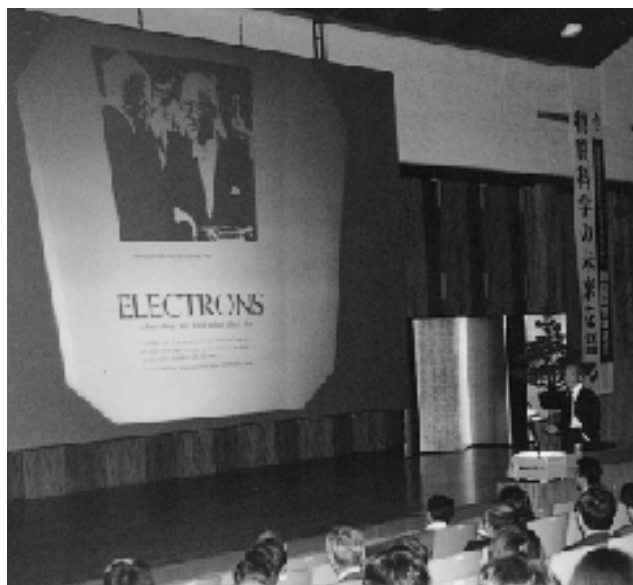
まず、分子の研究において、大気汚染物質とされていた小分子NOが意外にも生理的に重要なことが発見されて1992年に「サイエンス」誌の「今年を代表する分子(molecule of the year)」に選ばれ、1998年のノーベル医学生理賞となったことや、分子を「原子の集まったもの」と捉える立場に対して「分子を分子として扱う(Molecule is a molecule.)」という立場をとって分子軌道論を完成させたR. マリケン教授の業績を紹介し、分子の新しい(意外な)側面を研究することの重要性を説かれました。

続いて、物質科学においても意外性の追求が大切であることを説かれ、例として、赤松・井口両教授の有機半導体の発見、長倉研究室がリードされた化学反応への磁場の効果、東大物性研木下教授らの有機強磁性体の発見を紹介されました。次に、デカルトに始まる、自然科学研究において分化の流れに対して、異分野間の総合が最近の重要な課題となってきたことを取り上げられ、物質科学においても生命科学、地球宇宙科学、材料科学との結びつきを例として挙げられました。さらに視野を広げて自然科学と社会科学の結びつきに言及され、環境問題、複雑系の科学などが発展す

神奈川科学技術アカデミー理事長
文化勲章受章者
長倉 三郎 博士

ると指摘された後、好奇心の純粋な追求を目的とする「知の科学」に対して、科学を国や社会の目的に利用しようとする「サービス科学」の台頭に触れられ、科学研究において、効率化、専門化、競争の激化を招き、しかもそれが自己増殖的にフィードバックの効かない形で進む事について、コンラート・ローレンツ教授の「人間のおかした8つの大罪」に触れながら警鐘を鳴らされました。科学研究の様々な側面について高い立場から縦横に論じられ、聴衆に感銘を与えたご講演でありました。

(関 一彦)



マリケン教授の「分子」の概念について講演される長倉先生

名古屋 COE 国際シンポジウム

「分子集合系の機能とキャラクタリゼーション」を開催

物質科学国際研究センターは、名古屋大学COE分子不斉研究ユニットと共催で、平成11年1月7日(木)・8日(金)の両日、「分子集合系の機能とキャラクタリゼーション (Functionality and Characterization of Molecular Systems)」をテーマとした国際シンポジウムを名古屋大学シンポジオン並びに豊田講堂会議室で開催しました。



山内センター長の開会挨拶

これは化学分野における世界の中核的研究拠点として活発な研究を展開しているCOE分子不斉ユニットが文部省の国際シンポジウム開催経費からの支援を得て毎年開いている国際シンポジウムの第3回目で、物質科学国際研究センターが同ユニットの構成員を中心として平成10年4月に創設された経緯から、センターとの共催としたものです。分子が集合系を形成した時に発現する多彩な構造や機能を中心に、この分野をリードする外国人研究者8名と、国内の大学、国立研究所、企業研究者ら合計161名が参加し、英国王立科学院長のデ

イ教授・井口洋夫分子科学研究所名誉教授をはじめとする国内外の招待講演者14名による講演と59件のポスター発表が行われました。招待講演者の氏名と所属は次の通りです。

P. F. Barbara (テキサス大、米国)

P. Day (王立科学院、英国)

S. R. Forrest (プリンストン大、米国)

M. Grunze (ハイデルベルグ大、ドイツ)

J.-J. Kim (光州技術大、韓国)

W. Riess (IBM チューリヒ研、スイス)

W. R. Salaneck (リンチェーピン大、スウェーデン)

Y.-R. Shen (カリフォルニア大バークレー校、米国)

福田敦夫 (信州大繊維)

斎藤軍治 (京大院理)

井口洋夫 (分子研名誉教授)

小間篤 (東大院理)

谷忠昭 (富士フィルム足柄研)

関一彦 (名大物質国際研)

シンポジウム冒頭には開催責任者の野依良治理学研究科長と山内脩物質科学国際研究センター長が開会の挨拶を行いました。これに続く2日間の講演では世界をリードする研究成果が披露され、熱心な討議が繰り広げられました。参加者は化学・物理の両分野にまたがり、新しい物質科学の展開を強く印象づけるとともに、物質科学国際研究センター・COE分子不斉ユニットの成果を国内外に強くアピールする国際シンポジウムとなりました。野依教授のキングファイサル国際賞受賞が報じられて参加者に祝福される場面もあり、会議の様子はテレビでも紹介されました。

(関 一彦)



外国人講演者とセンターメンバーの討論

H. シーゲル先生との懇談会 - ヨーロッパの科学研究事情について -

物質科学国際研究センターは、平成11年1月10日～17日に国際アドバイザーボードメンバーの一人 H. シーゲル先生（スイス・バゼル大学教授）を招聘し、生物無機化学に関する講演会と、ヨーロッパ科学研究事情を中心的話題としたセンター関係教官との懇談会を開催しました。1月11日（月）には「アデノシン5'-三リン酸と他分子又はイオンとの反応における多様性」と題する講演が行われ、シーゲル先生の長年にわたるヌクレオチド金属錯体の溶液中の構造と反応性の研究がATPの加水分解反応メカニズムを見事に裏付ける結果となったことが披露されました。1月12日（火）にはグリーンサロン東山ミーティングルームにて野依理学研究科長、センター関連教官、堀田理学部・理学研究科事務長の出席のもと、シーゲル先生との懇談会が開かれました。席上、シーゲル先生はヨーロッパ科学財団(European Science Foundation, ESF)の活動について、多くの図表を用いながらとくに化学関係を中心に進行中のプロジェクトや予算などについて最新情報を提供されました。話題提供の後、昼食会をはずみ出席者との意見交換、歓談がなされました。シーゲル先生は、新しい本研究センターの目的から見てセンターの活動に大いに期待しております、との励ましの言葉を述べられ、和やかな雰囲気の中に有意義な会を終えました。

（山内 脩）



ヨーロッパの科学研究の在り方を説明するシーゲル教授



シーゲル教授の話に聞き入る本センターの関連教官

外国人客員教授紹介

Prof. Hong Maocyun

洪 茂椿 教授

(中国科学院福建物質結合研究所)



洪 茂椿 教授

滞在期間：平成 10 年 6 月 1 日～平成 10 年 9 月 30 日

研究テーマ

「機能性無機物質の創造」

洪教授は、1978年に福州大学を卒業後、中国科学院福建物質結合研究所において修士の学位を取得された後、1982年以来同研究所の研究助教及び教授を歴任されております。年令44才(当時)と比較的若い方ですが、中国を代表する無機化学者として中国科学院福建物質結合研究所の所長補佐の職にあります。新しい機能の発現をめざした遷移金属クラスターの合成で顕著な業績を上げられ、最近是非線形光学無機材料の開発に精力を注いでおられます。ご自身で実験されることが大変好きな方で、客員教授として本センターの無機物質合成研究分野に滞在中、連日夜遅くまで錯体合成に勤しまれました。短い期間ではありましたが、電磁氣的機能が期待される新規カルコゲン配位子を考案し、その遷移金属錯体の合成と構造決定に見事に成功されました。本センターの設立趣旨を十分に理解され、自ら率先して物質創造研究に邁進されたことに強い感銘を受けました。中国で最も充実した無機化学研究組織を持つ福建物質結合研究所と本センターとの緊密な協力関係が今後とも継続されることを期待しております。

Prof. Eugene Leonidovich Frankevich

ユージン レオニドヴィッチ フランケヴィッチ 教授

(ロシア科学アカデミー化学物理学研究所)



E. L. フランケヴィッチ 教授

滞在期間：平成 10 年 10 月 1 日～平成 11 年 3 月 31 日

研究テーマ

「有機固体の電子物性に関する研究」

「有機固体の動的光電物性についての研究」

フランケヴィッチ教授は、1930年生まれ、セントペテルスブルグ工科大学を卒業後、モスクワにあるロシア科学アカデミー化学物理研究所において博士の学位を得、1987年以来同研究所の研究主幹として活動しておられます。ご専門は有機固体の電子物性、特に磁場効果で、すでに280報を超える学術論文を発表しておられ、1986年に「化学反応における磁場効果の研究」でレーニン科学賞を受賞されるなど、この分野では世界的に著名な科学者の一人です。現在68歳ですが、ご自分で実験をし、解析もされる、まさに現役の実験研究者で、最近5年間でも20報の一流誌の論文、1冊の著書を出し、活発な研究業績を挙げておられます。今回は奥様とご一緒の来日で、当初は1月末までの予定でしたが、研究の進展に伴って3月末までの延長となりました。本センターの物質機能研究分野のグループや理工科学総合研究センターのグループと共同して、上記研究テーマのもとに、導電性高分子をパルスレーザーで光励起した時の励起状態の性質や動的挙動について、過渡光電流の測定による研究を行われ、多くの興味ある成果を得られました。

RCMS 行事予定



RCMS 創設一周年記念講演会

平成 11 年 6 月 4 日（名古屋大学シンポジオン）

創設記念講演会に引き続き、平成 11 年 6 月 4 日に、物質科学国際研究センター創設一周年を記念して講演会を本学シンポジオンにて開催します。文化勲章受章者の東京大学及び東京工業大学名誉教授向山光昭博士（現、東京理科大学教授）及びキングファイサル国際賞を今年の 3 月に受賞された名古屋大学教授野依良治博士を招待して、有機合成化学に関する話題を提供していただく計画です。向山教授は「“看看” 研究者に求められるもの」の題目でご講演くださる予定で

す。創設記念講演会及び創設一周年記念講演会の開催を機会に、定期的に、国内外からノーベル賞級の著名な科学者を本センターに招待して講演をしていただきたいと思いますと考えております。例えば、RCMS レクチャーシップアワードとして権威あるものを形作り、講演者として招待されることが名誉となるようにしていきたいと思ひます。

（北村 雅人）



東京大学および東京工業大学名誉教授
文化勲章受章者
向山光昭博士



名古屋大学教授
キングファイサル国際賞受賞者
野依 良治 博士



RCMS コンファレンス

平成 12 年 1 月 6 ~ 7 日（名古屋大学シンポジオン）

中核的拠点形成プロジェクト最終年度の名古屋 COE 国際会議は、「物質科学と有機合成 21 世紀の化学最前線」をテーマに RCMS コンファレンスとして開催します。医療、食糧、環境・エネルギーなどの諸問題に直面する現代社会において、有用な新規機能性物質の創製が強く望まれています。本国際会議では、この観点から、近年、とくに注目されている物質科学研究に焦点を置き、来るべき 21 世紀の化学の最前線を展望する予定です。有機合成を基盤として画期的な成果を上げている重要研究者を国外及び国内からそれぞれ 9 名と 5 名を招聘し、彼らの講演と質疑応答を中核に、最前線情報を交換します。同時に、50 名程度の新進気鋭の若手研究者によるポスター発表を催します。発表内容を厳選し、小規模ながら極めて密度の高い高水準の会議にしたいと考えております。新物質は

わが国が先導的な立場で国際社会に貢献できる科学技術の基礎をなすものであり、学術的意義に加え実学的重要性も非常に高いものであります。文部省の国際シンポジウム開催経費を得て、本会議は今回で 4 回目を迎えます。これまでにノーベル賞受賞者あるいはノーベル賞級の有機、無機、物理、理論化学者が名古屋に集合し解散することによって、国際的に認識されたといえると思ひます。さらに、COE 研究を基盤とした物質科学国際研究センターの創設を契機に、この会議を定例化する所存であります。平成 11 年度のコンファレンスはそのはじまりであり、物質科学研究に携わる超一流研究者を招聘すべく、現在、鋭意交渉中です。すでに 8 名の外国人招待講演者及び 5 名の日本人招待講演者から参加承諾を得ております。

（北村 雅人）

スタッフリスト

センター長	教 授	山内 脩 (3557)	b42215a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp
有機物質合成研究分野	教 授	北村 雅人 (2957)	kitamura@chem3.chem.nagoya-u.ac.jp
	助 手	佐藤 一彦 (2959)	sato@chem3.chem.nagoya-u.ac.jp
	非常勤研究員	カーン, サフラツ・アクタール (2959)	safraz@chem3.chem.nagoya-u.ac.jp
無機物質合成研究分野	教 授	巽 和行 (2474)	i45100a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp
	助 手	稲田 康宏 (3659)	yinada@chem4.chem.nagoya-u.ac.jp
	非常勤研究員	趙 群 (2476)	qzhao@chem4.chem.nagoya-u.ac.jp
	非常勤研究員	大川 妙子 (2495)	nishiwak@biol1.bio.nagoya-u.ac.jp
	研究支援推進員	小菅 園子 (2954)	kosuga@chem4.chem.nagoya-u.ac.jp
物質機能研究分野	教 授	関 一彦 (2494)	seki@mat.chem.nagoya-u.ac.jp
	教 授	篠原 久典 (2482)	nori@chem2.chem.nagoya-u.ac.jp
	助 教 授	今栄 東洋子 (2483)	imae@chem2.chem.nagoya-u.ac.jp
	助 手	松本 正和 (3656)	matto@aqua.chem.nagoya-u.ac.jp
	非常勤研究員	山本 雅人 (2945)	yamamoto@chem1.chem.nagoya-u.ac.jp
	非常勤研究員	マンナ, アブヒジット (3660)	amanna@chem2.chem.nagoya-u.ac.jp
生命物質研究分野	助 教 授	木越 英夫 (2479)	kigoshi@chem3.chem.nagoya-u.ac.jp
	助 教 授	吉久 徹 (2950)	tyoshihi@biochem.chem.nagoya-u.ac.jp
	非常勤研究員	山田 昭浩 (5869)	akihiro@chem3.chem.nagoya-u.ac.jp
共同研究分野	客員教授	干綱 眞信 (東京大学大学院工学系研究科教授)	
	客員教授	フランケビッチ, ユージン・レオニドヴィッチ (ロシア科学アカデミー化学物理エネルギー研究所研究室長)	
国際アドバイザーボード		グルンツェ, ミカエル (ハイデルベルグ大学教授)	
		ホフマン, ロールド (コーネル大学教授、ノーベル化学賞受賞者)	
		カガン, アンリ・ポリ (パリ南大学教授)	
		シーゲル, ヘルムート (バーゼル大学教授)	
協力教官	教 授	野依 良治 (理学研究科、理学研究科長)	(2956) noyori@chem3.chem.nagoya-u.ac.jp
	助 教 授	大内 幸雄 (理学研究科)	(2485) ohuchi@mat.chem.nagoya-u.ac.jp
	助 教 授	小谷 明 (理学研究科)	(2954) b42170a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp
	助 教 授	近藤 忠雄 (化学測定機器センター)	(3060) tkmail@cic.nagoya-u.ac.jp
	助 手	鈴木 健之 (化学測定機器センター)	(3061) suzuki@cic.nagoya-u.ac.jp
研究支援組織		理学部・理学研究科技術部 理学部・理学研究科事務部	